

「軍都」から「学都」へ — 豊橋の場合 — (2)

佃 隆 一 郎

要 約：戦前は「軍都」であったとよく言われている愛知県豊橋地区であるが、全国や他都市を対象にした最近の「軍都」研究の進展により、この呼称は当初はまだ使われていなかったのかではという指摘がなされてきている。ここではまずその問題提起をうけて、これまで豊橋の歴史を語る際に用いられていた「軍都」という語を確認・検討してみて、さらに筆者自身がかねてから注目していた、当時の一地元新聞がよく出していた「グレート豊橋市」というスローガンの呼称との関連を再確認してみた。

【前回分。『一般教育論集』第45号—2013年9月刊—所載、一部改訂】

「学都」という呼称も近年の造語のようであるが、戦前の旧陸軍施設が戦後愛知大学をはじめとする各学校に転用された点で、豊橋は「軍都」から「学都」になったとも考えられる。ただしそれまでには、1925年まで第十五師団敷地として使われていた跡地の活用などをめぐる地元の葛藤があり、「グレート豊橋」論も揺れ動いた。その折に十五年戦争が発生し拡大したことで、豊橋は以前とは少し異なる形で再び「軍都」となっていったが、敗戦時無傷で残っていた師団跡は、豊橋再生のため確かに期待されたのである。【今回分】

キーワード：軍都、学都、グレート豊橋、大豊橋、敗戦直後の豊橋、第十五師団、豊橋教導学校、豊橋予備士官学校、愛知大学（前回分を含む）

今回のはじめに

前回重点的に紹介してみた、河西英通^{かわにしひでみち}『戦争の経験を問う せめぎあう地域と軍隊』（岩波書店、2010年）では、「軍都の運命」としてこうも述べられている。

〔師団削減に踏み切った1925年の〕宇垣軍縮は単なる軍備縮小ではなく、軍備の近代化・科学化を伴った軍事のスクラップ・アンド・ビルドであったが、対象と

なった軍都の運命はその後大きく分かれた。岡山は政治都市+学都としての道を歩み、久留米は廃止されたものの小倉師団の移駐で復活した。問題は高田・豊橋・小倉である。(…)豊橋には歩兵連隊、騎兵連隊二隊が残ったうえ工兵連隊が入り、小倉には歩兵連隊が残ったうえ野戦重砲兵連隊が二隊に増え、産業都市としても再生する。しかし、仙台の第二師団管下に入った高田はそうした転生ができ

(2)

「軍都」から「学都」へ — 豊橋の場合 — (2)

なかった。

(12～13ページ。〔〕内は引用での補足
—以下同一—)⁽¹⁾

ここから河西氏は、軍都として「末端」「周縁」であった新潟県高田（現上越市）のその後の“苦闘”を述べて検討しているが、師団廃止都市としてここでは“処置とその後が恵まれていた”ように捉えられている豊橋も、南郊（当時の渥美郡高師村）の第十五師団跡地が大部分空き地となったことには変わりはない。その跡地はいくたの曲折を経て、戦後まもなく愛知大学など各学校の新設や移転によって“文教地区”として再生したが、それは果して豊橋が「軍都」から、現在いくつかの都市が自称しはじめている「学都」⁽²⁾に変身したことの証しとなりうるものであろうか。引用した河西氏の文には「岡山は政治都市+学都としての道を歩み」とあったが、これは岡山市に1900年設立されていた第六高等学校（岡山大学の前身）の存在が、県庁所在地でもあった同市に影響を与えつづけ、むしろより重くなったということであろう⁽³⁾。ならば県庁も旧制高校もなかった豊橋は、岡山とはどこまで同様であり、どこから違ったものになったのであろうか。

今回はこうした問題意識から、形の上では戦後旧軍隊敷地が各学校になった豊橋で、イメージ的に「軍都」から「学都」へという捉え方があったかという点について、当時の書物や新聞記事などから検討を試みたいが、その前に第十五師団廃止直前から「脱・軍都」のローガンとして一部地元紙で提唱されていた「グレート豊橋市」論の動向を交えて、豊橋での師団廃止から終戦までの動きを、前回より引き続き形で見てみることにする。

3. 「軍都」豊橋の曲折 —第十五師団跡地その後—

・第十五師団廃止の影響・関連問題と、それへの対応の模索

1925（大正14）年5月1日に行なわれた豊橋第十五師団（解散・撤収は隷下各部隊とも前月末までに実施）廃止の地元への影響は、まず貸家業への打撃として現れた。

『豊橋市史』では、「師団廃止に伴う問題の一つに兵営前町があった。〔師団跡北隣りの〕高師村小池付近は3千余名の顧客を失い、13軒の軍隊専門の土産物店、40軒の料理屋・宿屋をはじめ、これに関連していたおよそ100軒の商家はみるみるうちに衰退していった」（原文の漢数字を一部算用数字に改めた）と、廃止直後にあたる1925年5月5日付『新朝報』記事を典拠として説明されていて⁽⁴⁾、そこから筆者は先に、当時の地元紙の一つ『参陽新報』の関連各記事（同紙に最も多かった）を検討して、「師団廃止直後の豊橋地区への影響は、貸家業を中心に“将兵を相手に生業を立てていた”各業者に及んでいたことが看取されるのであり、とりわけ師団周辺では、市内での鉄軌道の延長・開業が追い打ちをかけたことがうかがえる。そしてそれは時間が経つにつれてじわじわと、豊橋全体の活力を蝕んでいったのではなからうか」⁽⁵⁾との見解に達したところである。

こういった、師団跡周辺をはじめとする豊橋地区全体への長期的影響とは別に、当面の現実問題として、部隊の廃止によって師団跡に空き地が多数発生したことがあった。今回の冒頭の河西氏の文からも、師団が廃止された地区にも見返りとして部隊異動による転入が行なわれたことがうかがえようが、宇垣軍縮ではまさしく、全国的な異動によって（師団に限らず）部隊が全廃となる地区が生じないようにする政治的配慮がなされた⁽⁶⁾。豊橋でも市内の歩兵第十八連隊や南郊の師団跡地西側の騎兵第四旅団が存置されたほか、名

古屋から工兵第三大隊（のち連隊に）が東郊の同第十五大隊跡地に転入したが、師団跡地については歩兵第六十連隊・野砲兵第二十一連隊・騎兵第十九連隊・輜重兵第十五大隊といった廃止各部隊の衛戍地（現在でいう駐屯地）が、陸軍管理のまま空いてしまうことになったのであり、師団跡一帯の雰囲気が一気に寂しくなったことは想像に難くない。

この状況を打開すべく期待されたのが、第十八連隊の師団跡への移転運動であった。これは1885（明治18）年より豊橋に設置されていた歩兵第十八連隊をどこかに移転してもらい、空いた所在地（吉田城跡。現豊橋公園一帯）を払い下げてもらって都市再開発に活用しようという構想であって、1920（大正9）年ごろより市当局や市民の間で提唱されはじめ、実際に第十五師団存続運動の一環として陸軍への働きかけが行なわれていたようである⁽⁷⁾。そして十五師団が廃止になってからも、十八連隊は伝統の部隊ゆえに存置されたのであるが（宇垣軍縮での部隊異動は、日清・日露戦争に参加した部隊を存置・移転させて同戦争後新設された部隊を廃止することが基本方針であった）、師団跡の活用と市街地の活性化という両面から、連隊移転は行き先を師団跡に明確化した形で望まれたのである。

ここで豊橋日日新聞を見てみれば、（陸軍の誤解を招くとして一方であった）移転運動への批判意見を「退嬰的、消極的」と断じるとともに、市の都市計画と連隊移転（による再開発）が不可分なことを強調した（1925.4.29/30「笑ふべき退嬰観念（上）／（下）」、27.2.10「十八聯隊の移転断行」ほか）。実際は市長の交代などから、運動はその後進展を見なかったが、同紙はそれらの主張で従来の「グレート豊橋（市）」に加えて、「大豊橋（市）」という語も用いるようになり、しだいに後者が主になっていった。この二つの語の関係や傾向的差異については前稿の終わりで少しふれたが（『一般教育論集』45号、26ページ）、筆者は現段階

では、問題提起の主眼が移っていったことの変遷というよりも、“流行語としての変化”に過ぎなかったとの考えである⁽⁸⁾。

そして、豊橋日日と「大豊橋」観と誘致運動との関連は、少しあとの1929年2月1日付社説「師団誘引運動」で明白に示された。ここでは、産業・工業都市と定義した「大豊橋」を建設すべく他に適当な方法があるならば之をも併せてもつて理想の実現を早かしむる様努むる事又市民の責務」とし、その「方法」として誘致運動があるとしているのであって、さらに「第十五師団ある事によつて大なる霑^{うる}ひを受けた事は否定出来ない事実」で、「市の現状としてはこうしたものあつた事は無きに優る」と、十五師団をなつかしみ廃止を惜しむことが明らかに意識されているのであり、かつての「グレート豊橋」観で見られた、師団との決別による独創的都市の建設という理念は後退していた。その社説のタイトルに「師団誘引」とあるように、この時期には名古屋城跡の第三師団を郊外に移転させる機運が発生したのを受け、（市内の第十八連隊と同時並行する形で）同師団を第十五師団跡地に誘致しようという動きも出てきたのであり、豊橋日日はこの後も、十五師団跡を活用する見地から三師団の誘致を支持した（1929.7.4「空兵營の利用」ほか）が、これも実現しなかった⁽⁹⁾。

実際にはその間第十五師団跡地は、本部（師団司令部）にあたる部分は騎兵第四旅団司令部に転用されていたが、そこには師団廃止直後のわずかの時期、第十五師団廃止の見返りに豊橋に新設された飛行第七連隊や高射第一連隊が入っていた⁽¹⁰⁾。しかし両連隊はほどなく、歩兵連隊が廃止された浜松市に移転したのであって、豊橋の地元では師団廃止時に続き、以前からの演習地賠償問題がたたったからとの憶測が流れることになった。

演習地（場）賠償問題とは、師団所在地南部の高師・天伯原での陸軍演習に周囲の農地

も使われたことが、関係農民にとって農繁期の死活問題となっていたことに対する補償問題である。住民の声をうけた地元二川町・高師村・高豊村（いずれも当時）の各町村長が、1923（大正12）年ごろより陸軍に農繁期の演習回避や射撃時刻の明示を求めて陳情を続け、翌年4月には陸軍の譲歩により、年5万円の賠償で一応調整されたが、次年度以降の賠償額や支払い方法をめぐって交渉が難航するにいたっていた⁽¹¹⁾。

豊橋日日にしても、飛行連隊が浜松に移される情報が流れた段階で、移転を防ぐための演習地賠償問題解決を主張した（1925.8.11「演習場の損害賠償」ほか）が、まもなく飛行連隊の移転が決定したことで、「国防」への妨害との見地から陸軍・市・住民すべてを批判した（25.8.29「虫のよい陸軍省」ほか）。この“軍をも敵に回した”姿勢はやはり注目されるべきものであろうが、第十五師団廃止実行時から「国防」という語も関連論で強調してくるようになったことは、また豊橋日日の傾向の一つとなっていた⁽¹²⁾。

そして、あたかも1931年9月に満州事変が勃発した2日前に掲げられた社説は、それまでの豊橋日日の一連の主張の総まとめといえるものであった。そこではまず、陸軍再軍縮のムードをうけて部隊誘致運動再燃の兆しが今回の軍制改革案によって現れているとした上で、宇垣軍縮での部隊転入や教導学校の新設にしても「それによって十五師団の設置されて居た時程の恩恵は勿論ない この多くの兵営に兵士が屯在して居ると居らないとは物質精神両方面に影響する処は大きい」（1931.9.16「部隊誘引再燃」）と、やはり師団存在当時をなつかしむ心情をこめつつ、師団と豊橋地区との物心両面の関係とその損害を認めた上で、演習地問題解決と（残る「空地」への）部隊誘致の運動の持続を望んでいるが、主眼は「国防」のためであり、「大豊橋」建設についてはまた後退したのであった。

折りしも豊橋地区では、在郷軍人会を動員して「満蒙への脅威」を喧伝した陸軍の「国防思想普及運動」が、第十八連隊長の“熱意”のもと盛り上がりを見せていた⁽¹³⁾。その前の山東出兵（1927～28年）では、動員された十八連隊（第三師団隷下に復帰）の見送りの際、豊橋市街地は相当の賑わい享受したことから⁽¹⁴⁾、軍への心情的回帰とともに「国防」という対外侵攻への支持は、「旧軍都」豊橋で確実に広がっていたのではなかろうか。

・十五年戦争突入前後の陸軍教導・予備士官学校への転用と、 「軍都」復活から敗戦へ

1931（昭和6）年9月18日に奉天（現瀋陽）郊外で起こされた柳条湖事件以来、その直前から展開されていた「国防思想普及運動」の影響もあった世論の圧倒的支持のもと、日本の関東軍は満州事変を推し進めていき、戦火の上海への拡大の間に「満州国」を樹立した一方で、日本は国際連盟を脱退し、国際的孤立化の道に入っていた。最終的に「十五年戦争」となる一連の戦争の、いわば第一段階である。

いったん事変前に戻るが、第十五師団跡地のうち本部に隣接した歩兵第六十連隊跡地（現在の愛知大学豊橋校舎敷地の北半分）は、飛行・高射連隊の浜松移転への再度の見返りの形で1927（昭和2）年夏に、新設された豊橋陸軍教導学校（下士官養成機関）歩兵科に転用されていた。ただし同学校（課程1年間）の生徒の総数は概ね500人強、多い時期でも1000人弱であって、十五師団廃止によって減少した兵員数には遠く及ばなかった⁽¹⁵⁾。加えて遊休化した敷地が依然点在していたことから、当局も豊橋日日新聞も師団跡への、市街地の十八連隊の移転や名古屋の三師団の転入を引き続き目論んだのであった。

しかし満州事変勃発後の1933（昭和8）年

には、陸軍教導学校に砲兵科と騎兵科が増設されて生徒数が倍増し、それにともない敷地も、第六十連隊跡の南・西隣りの師団本部跡と野砲兵第二十一連隊跡（現県立時習館高校などのある地）にまで拡充された、その2年前には、騎兵第十九連隊跡が払下げされて福岡尋常高等小学校などになったのであり、十八連隊や三師団の転入は実現しなかったものの、豊橋市南郊（1932年9月1日に高師村は豊橋市に編入合併）の旧十五師団敷地は、一応ほぼ活用されるにいたった。

そして、その時の豊橋日日の社説では、師団廃止後「市民の自覚によつて豊橋市が将来其の自力を発揮して商工業に一大飛躍を為すべき揺籃時代に入つたことは大いに力強さを感じしめる」とした一方で、「軍隊と古い因縁ある我が豊橋市に」置かれた教導学校が拡充されることになった今こそ「豊橋市と軍隊とは将来益々其の密接の度を増すの可能性を地理的にもつてある丈に多年癌となつてある演習場問題の解決を図ることも商工業の発展と共に等閑に附することは出来ない」と結んでいるのであるが、その主張の背後には前々年来の「満洲上海両事変突破以来の銃後の衛りの実績」があったのである（1933.7.23「演習場問題を等閑視するな」）。十五年戦争の発生から最初の拡大にともない、少なくとも豊橋日日新聞は、“地元の発展”から“国家の防衛”へとより主張のウエイトを移していく形で、隣接町村との合併で一応形を整えた「大豊橋」と軍隊との深い関係を（「軍都」の呼称はやはり用いていないが）自覚し、持続を望んだのである。

その社説で豊橋日日が改めて解決を望んだ演習場問題は、1937（昭和12）年になって地元妥協の形で決着したが、それは十五年戦争の第二段階にあたる日中戦争の勃発、全面化と無関係ではなからう。まさしくこの年の7月7日に北京郊外で起こった盧溝橋事件以来、戦火は華北から上海、南京、さらに中国

主要部各地に拡大していったのであって、第十八連隊を含めた第三師団も、上海方面に再度出動したのち転戦した⁽¹⁶⁾。

日中戦争はほどなくして、日本側の見通しの甘さなどから泥沼化するにいたり、日露戦争をはるかに超えた規模の「国家総力戦」の様相を呈することになった。それに対処するため、政府は開戦後（宣戦布告をしなかった一方で）早くから国民精神総動員運動の開始や国家総動員法の制定をせざるをえなくなり、国民の生活はいよいよ規制されはじめた。それら施策に関連して、各地の各事業の統合も推し進められ、豊橋の新聞界も日中全面開戦翌年の1938（昭和13）年11月、地元各紙が『豊橋同盟新聞』に一本化されたことで、豊橋日日が常に展開していた各種の主張は、ここで幕を下ろすことになったのである⁽¹⁷⁾。

その一方で、日中戦争の拡大と長期化は部隊指揮将校の不足をもたらすことにもなり、甲種幹部候補生（現役入隊した高学歴者を選抜し、非常時に将校にさせる制度）該当者を教育するための陸軍予備士官学校が1937年、教導学校に併設される形で豊橋などに新設された（形式上は翌年4月設置）。施設は各教導学校と併用されたが、豊橋では1940（昭和15）年11月に市の東郊外に教導学校の校舎が新築されたことにより、従来（すなわち十五師団跡）の校舎は予備士官学校のみとなった。

またこの時期には、豊橋の北隣りにあたる宝飯郡豊川町（当時）に1939（昭和14）年12月、“東洋一の規模”と称された海軍工廠が建設されたのであって、豊橋に司令部を置く師団は復活しなかったものの、豊橋を中心とした地方都市圏は、再び「軍都」になっていったといえよう。ただしそこでの「軍都」は、以前の“消費面で軍の恩恵を受け、日常的に兵士との接触があった”という形とは性格を異にしたものであったはずである。すなわち、教導・予備士官学校にせよ、日中戦争開始後臨時編成された部隊にせよ⁽¹⁸⁾、生徒や兵士

(6)

「軍都」から「学都」へ — 豊橋の場合 — (2)

は訓練や出動により、地元民との接触の機会
は激減し、戦死した兵士の慰霊も該当者が増
えていった分、しだいに大々的には行なわれ
なくなったようであるからである。十五年戦
争の国家総力戦化は、豊橋の「軍都」への心
的な拠り所を奪っていったのであり、それ
はやはり、ほかの「軍都」も同様であった⁽¹⁹⁾。

そして十五年戦争は、1941（昭和16）年12
月の米英国ほかへの宣戦により、第三段階と
しての太平洋戦争に突入した。近年「アジア
太平洋戦争」とも称されつつあるこの戦争の
経過と結果は比較的知られているであろうか
ら、本稿では省略するが、豊橋地区との関連
について述べれば、第十八連隊（新設された
第二十九師団隷下に変更）や臨時編成部隊が
ガダルカナル・サイパン・グアムといった激
戦地で相次いで壊滅・全滅したのに続き、戦
争末期の1945（昭和20）年には空襲で6月20
日に豊橋市街地が、8月7日に豊川海軍工廠
がそれぞれ壊滅し、8月15日の「玉音放送」
による降伏・終戦を迎えることになった。

豊橋の教導・予備士官学校としては、1943
年8月に教導学校が全廃されたのにもな

い、予備士官学校と（移転していた）旧教
導学校はそれぞれ第一・第二予備士官学校に
改称された。その後終戦直前の1945年7月
になって「第二」に千葉県への移転命令が下り
たことで「第一」は旧称に戻り、そのまま敗
戦により廃校となった。ただし空襲による被
害は、予備士官学校をはじめとする陸軍施設
はいずれも軽微であって⁽²⁰⁾、結果的にこれ
が、戦後早くからの転用につながることに
なったのである。

4. 「学都」豊橋としての再生 — 愛知大 学の創設 —

・豊橋の学校全体の再編と、新生愛知大学 への期待

1945（昭和20）年8月の敗戦時、豊橋陸軍
予備士官学校（旧第一）は大きな混乱もなく
清算を終えて関係者は引き揚げ、ほかの元第
十五師団のものを含めて旧陸軍施設は、国有
地のまま豊橋市が管理することになった。一
方で焦土と化してしまっていた豊橋市街地
では、豊橋中学（旧愛知四中）などの学校も例
外でなく、南郊の旧軍施設は絶好の移転先と

【表】豊橋（もと第一）陸軍予備士官学校及び、周囲の陸軍各施設の転用一覧

— 近藤恒次『時習館史』885～887ページおよび、
水口源彦『南栄町物語』153ページの記述より作成—

終戦時の用途	計画された転用先（1945.11）	実際の転用先
豊橋陸軍 予備士官学校歩兵隊	名古屋工業専門学校 (現 名古屋工業大学)	愛知大学 豊橋校舎
豊橋陸軍 予備士官学校砲兵隊	県立豊橋中学校 (現 県立時習館高校)	同左及び、 各公営施設
名古屋陸軍兵器 補給廠豊橋分廠	豊橋市立工業学校 (現 県立豊橋工業高校)	同左及び、 県立豊橋聾学校
名古屋陸軍兵器補給 廠豊橋分廠東倉庫	豊橋市立商業学校 (現 県立豊橋商業高校)	場所不明 (現 住宅地か)
名古屋師団管区兵器部 豊橋出張所（兵器廠）	豊橋市立農業学校 (新設予定)	同左→市立南部 中学・栄小学校

※豊橋市立商業学校は市内東部の工兵連隊跡に移転し、農業学校は時習館高農業科となったのち廃止

なった。それらに対して、市は終戦後まもない1945年11月に「豊橋市払下貸下軍用土地建物利用案」を発表して、それぞれの転用案を列記したが、「どの施設にも住宅や官公庁、学校等の利用計画が目白押しであった」⁽²¹⁾ (【表】参照)。

そして予備士官学校敷地については、まず田原街道を挟んで西側の元野砲兵連隊敷地(第十五師団時の用途、以下同)に豊橋中が入り(学制改革後、豊橋時習館高校を経て時習館高に)、さらに東側の元師団本部・第六十連隊敷地には、やはり敗戦により消滅した、中国上海の東亜同文書院大学から帰国してきた関係者有志を中心にした新大学が、翌1946年11月15日に愛知大学として当時の文部省より旧大学令に基づき認可され、創設された⁽²²⁾。周囲のほかの旧軍施設にも(当初案からは変更も見られたが)各学校が入り、敗戦までは「軍隊の街」であった近隣地区は、「学園の街」へと特色が変わることになった。⁽²³⁾

それから約10年後における「軍都」豊橋の変貌について、前回先述した伊藤郷平編『地方都市の研究―新しい豊橋―』(古今書院、1954年)では、以下のように総括している。

敗戦までの豊橋市は軍都として全国有数のもので、第十八聯隊、第十五師団から予備士官学校設置等、その軍施設は兵営演習場等広大な面積を占めたのであるが、戦後兵営は愛知大学・時習館高校の利用にはじまり文教区へと変向し、各種軍施設の建物は庶民の住宅に、広大な演習地・飛行場は大工場敷地と開拓農村に利用されている。城址の軍施設は公庁区とリクリエーション地区に生れ変わり、市民の眼を豊川の清流から隠蔽していたすべてのものを払拭して、名都たり得る条件の一である水の辺都市として解放したのである。(1～3ページ)⁽²⁴⁾

このように、戦後復興の過程で豊橋は、敗戦前に軍と関連していた各地区の各施設が別々

に転用されていったことがわかるのであり、「軍都」のすべてが「学都」になったとまでは言えないが、旧第十五師団以来の「兵営」が「文教区」化された最大の契機はやはり、東三河地区最初の高等教育機関となった愛知大学の新設であろう。

最後の東亜同文書院大学長だった本間喜一らが新大学を国内に設立することを模索していたことは、当時の豊橋市長ら幹部にとって、「学都」というイメージまで抱いていたかとはともかく、焼失を免れた軍学校を活用して初の大学を創るという、物心両面で豊橋を再生させる絶好のチャンスと映ったことは明らかであろう。これも前回取り上げた『豊橋市戦災復興誌』(豊橋市役所、1958年)では、いわば当局の公式な記述として、

軍施設は機を逸しては他に転用される懸念もあったので、〔元東亜同文書院大の〕神谷〔龍男〕・本田^(ママ)〔本間喜一か木田彌三旺〕教授らは豊橋市初代市長大口喜六、現市長横田忍に大学設立についての全面的協力を申し入れた。これに対し横田忍市長は全面的に援助する意向を示した。当時、豊橋市は人口12万、軍都としての残がい各所に残していた上、新大学設立の障害となるような既設の大学・専門学校はなく中等学校が最高学府であった。(326ページ)

と、旧同文書院大側からのアプローチとした上で豊橋側の“客観的情勢”を記している。

また、当時の新聞記事としては、新生「愛知大学」の開設認可について、戦時下に(先述した『豊橋同盟新聞』を含めた)県下の各新聞を統合して誕生していた『中部日本新聞』に「文化豊橋の第一歩 愛知大学に市民の期待は大きい」と題して、以下のように報じられた。

豊橋市高師町財団法人愛知大学は設立を認可された旨 十九日同大学仮事務所に
■■〔判読困難〕があつたので 二十日

同校うみの親本間教授などの来豊をまつて願書の受付や入学試験準備に取りかゝる、豊橋市でも同大学の校舎となる豊橋商業学校を他に移すため候補地として元輜重兵舎と市立農学校の二敷地が挙げられ早急に施設を施すことになった、また地元豊橋市では近く後援会を設立して資金一千万円の募集を行ふことになり校長には桑原〔幹根〕知事の内諾を得てあるので準備委員会を開き規約、役員などを決める

【横田豊橋市長談】愛知大学の設立で豊橋市の復興はまつ教育から起り文化都市として発展する最大の素因となると思ふ、今後は地元として大いに協力して行く考へである (1946.11.20付)

この時期横田市長が「俺は三河人だ」と述べて愛知大学設立への協力を快諾したというエピソードは、愛大側でよく取り上げられているが⁽²⁵⁾、それが単なる伝説ではないことは、上記記事の談話からもうかがえよう。豊橋復興の最初にして最大の“目玉”として、第十五師団跡地はこうしてよみがえり、期待されたのである。

・“軍から学校へ”の意識変化と定着

東亜同文書院大学廃止から愛知大学創設までの、本間喜一をはじめとする関係者の労苦と努力や、愛知大創設後しばらくして発生した「愛大事件」(1952年、学内に立ち入った警察官が学生と衝突)で、学長の本間が法廷で学生を守った一方で地元のほとんどから愛大への寄付を止められたという試練については、詳細を愛大史関係の各書に譲ることとして⁽²⁶⁾、本稿では戦後および愛大創設後約10年間における、豊橋が“軍都から学都に”変貌したことをうかがわせる新聞記事や書物の記述を紹介することで区切りとしたい。

まず『中部日本新聞』1953年7月14日付では、「話題を求めて 三河今昔集 文教地区として

更生 軍隊で知られた高師原」と題した特集で「豊橋市の南端高師原は(…)先住民族の遺物とみられるものが発掘され、先史時代すでに相当開けていたものとみられる」とした上で、その変遷を以下のように述べている。

◇…時は流れて明治三十八年高師に第十五師団が置かれたのをはじめ、時の軍隊拡張の時勢にのり歩兵、騎兵、砲兵連隊、憲兵隊、陸軍病院、予備士官〔学校〕、第二予備士、教導学校など相ついで設置され、兵隊の街と化し高師、天伯は日本的な演習場となり若人たちは戦のための血と汗を流す場所となった。

◇…戦後は軍隊の解散で時代から取残されようとしたこの地は忌むべき戦災をまぬがれ旧兵舎は愛大をはじめ高校、商、工高校、中、小学校に活用され、昔日と変った文教地区としての落ち着きを備え、また日本一の援護施設愛正郷〔第二予備士官学校建物を転用〕には三百二十五世帯が収容されつつましい生活を送っている。

さらに同紙は1955年10月7日付(三河版)で、連載特集「東三河新風土記 第四回 豊橋南部 地帯 北欧的なポプラ並木 軍靴にかわる学生の町」で愛知大学一帯を、愛大事件にもふれる形でこう紹介している。

戦後豊橋市内で最も大きく姿を変えたのはかつての兵営区であるこの〔南栄駅付近〕一帯であろう。(…)旧陸軍の施設は皮肉にもほとんど空襲をまぬがれ広大な敷地と建物が無傷のまま文化産業施設に転用されていった。その筆頭は予備士官学校跡の愛知大学だ。詰エリ服もスマートな大学生を予想していた市民にとって〔東亜〕同文書院大学、台北〔帝国〕大学などの引揚げ予科生らのバンカラ姿は少なからず奇異の感を与えたらしい。学生相手の飲食店や下宿もでき始めたがサイフの底が見えているのと当時の食糧

事情から焼芋屋に毛が生えた程度のものであった。(…)愛大の正(副)門に向い合って南部警部〔察〕派出所がある。愛大事件ははじめ学警対立の激しかったころ設けられたが、その後衝突もなく所員二十九名が南部地方の治安に任じている。(…)／愛知大学と田原街道を隔てて名門時習館高校がある。工業高校もすぐ近くにある。ロウ学校、盲学校、福岡小学校、南部中学校、栄小学校などを含め緑地帯に恵まれた理想的な文教地区となっている。愛大南にそびえるポプラ並木の道を散歩すれば多少は北欧詩人的気分も味わえようというもの。

こうした記事からは、まさしく旧陸軍師団施設とその周辺が雰囲気やイメージ的に大きく変化してきていることが、戦後復興の象徴的成功例として情感を交えて報じられていることが看取できる。

同時期の各書にしても、先述した『地方都市の研究―新しい豊橋―』では、

右〔前述〕の如く旧軍用地、同建物は文化産業住宅の施設として開放され、これを契機として新しい発展段階に入った。南栄町付近には新商店街が育ち、図書館・警察署・消防署の各支所が置かれて市南部の一中心地を形成しつつある。かくて軍都は急角度に変貌し、豊橋の文化・産業都市としての性格変化の上に大きな役割を果しているのである。

(56ページ)

と結んでいて、また『豊橋市戦災復興誌』では、かく自由と平和の大学は皮肉にもかつて軍国主義の温床であった陸軍予備士官学校の跡に、あたかも戦火に焼かれた土の中から若草のもえ出ずるごとく呱呱〔ここ〕の声をあげたのである。

(329ページ)

のように、愛知大学の誕生を讃えているのである。

これらの記事や記述は、愛知大学をはじめ各学校が“集結”したこの地区は「学都」の前段階としてのいわば「学地区」であるとの認識が、戦災復興が一段落したこの時点に内外で定着しつつあったことを示しているのではなかろうか。

おわりに

本稿ではこれまで触れてこなかったが、宇垣一成陸軍大臣は軍縮実施当日に、「日記」で“師団廃止によって所在地は打撃を受けるから、その住民は二度と軍縮など口にすまい”の旨の、自らの決意と自信のほどもしたためている⁽²⁷⁾。その意味で、少なくともものちには「軍都」と称されるようになった師団廃止対象の各都市は、軍部の巻き返しを図った宇垣にとって一種の実験台であった。

そしてその一つであった豊橋は、第十五師団が存在していたことが“師団のあるまち”として近隣住民からたしかに一目置かれていて⁽²⁸⁾、師団廃止が発表されたことで自らも“軍に依存している”と意識するにいたった。その中で軍からの脱却を主張した豊橋日日の姿勢が、そのまま当時の豊橋の動きを表わしていたとまでは断言できないにしても、十五師団廃止という豊橋の“試練”は、宇垣の目論み通り「軍都」としての自覚(による軍への支持)を地元呼び起こしたと考えている。

一方で当時、師団とともに地方都市のステータスシンボルになっていたとされる旧制高等学校など⁽²⁹⁾、高等教育機関がなかった豊橋にそれへの渴望があったかはまだ確定できていないが、敗戦により軍との関わりが完全になくなった豊橋で、新大学誘致の機運が出てきたことで、「学都」への足がかりとなるという意識が生まれたことは充分想像できよう。そして十五師団跡地の大部分が各学校に転活用できたことは、戦災からの豊橋の復興や再生の象徴として、内外各方面から注目

されたことがうかがえるのである。

今回は愛知大学創設から約10年後を区切りとしたが、その後しばらくしてから豊橋では、国立豊橋技術科学大学（1976年設立）や豊橋創造大学（1996年短大が昇格）が新設され、「学都」へ一歩ずつ前進したともいえる。ただ愛大は中心・拠点名古屋へと移っていったのも事実であり、今後豊橋が「学都」を前面に打ち出せるかについては、まだ課題を多く残しているであろう⁽³⁰⁾。しかし、豊橋の一つの特色と言えるのは、第十五師団以来の旧軍の「遺産」としての、愛大・時習館高ほかからなる文教地区の存在であるのは間違いないところであるから、たとえいづれも“便宜上の造語”であっても、「『軍都』から『学都』へ」という言葉は、豊橋市の歴史に課されつづけているテーマであると思えるのである。

本稿での対象時期から（将来を含めた）現在に至るまで、豊橋市が各大学とともに「学都」を目指していったかという点については、今後さらに検討していきたいところである。

（前回を含めた本稿の作成には、2013年7月の名古屋大学での近代史研究会における発表「『軍都』豊橋の葛藤」に際しての活動が、多くの部分でもとになっている。発表の機会を与えて下さいました同会の方々に、この場を借りて感謝申し上げます）

註

- (1) 河西氏のこの書のサブタイトルは「『末端』周縁 軍都・高田の模索」。前回も本文で引用したが、同書の「『軍都』という名称それ自体は、満洲事変期から一九四五年の敗戦までせいぜい十数年の寿命であったが、地域に『軍都』という自己認識が誕生・定着するまでのプロセスこそ重要である。そこに軍事史と地域史の交差を見出すことが可能であり、地域にとって軍隊とは何であったかをうかがうことが出来る」（10～11ページ）との問題提起を、ここで改めて確認しておきたい。
- (2) 「学都」（パソコンのワードでは現在のところ一度の変換はできず）についてWikipediaでは、「曖昧さ回避」のためのカテゴリと断った上で、「『学問の都』、『学校が多い都市』などを意味する普通名詞」とし、さらに「各自治体が用いるキャッチコピーの1つ」と定義しているのであり、「軍都」よりもいっそう近年の造語と取れなくもない。
各地区における「学都」の定義としては例えば、「学都仙台コンソーシアム」のホームページ（http://www.gakuto-sendai.jp/about_g/history.html）では歴史的根拠として、「仙台が『学都』としての名声を確立したのは古く、既に明治40年（1907年）12月の地元紙に『学都と学界』という標題の記事が見られ、大正年間にも『学都』の呼称が印刷物に見られます」とあるが、そういった個別の主張への検討は今後の課題として、ここでは引用文にもある岡山大学の、地域総合研究センターでのホームページ（<http://www.okayama-u.ac.jp/user/agera/research/definition.html>）で掲げられている「『学都』とは、固有の歴史と文化を持った地域と高度な教育研究機関である大学が、豊かな人間関係を築き、協働して創りあげる地域をいう。すなわち、そこでは人権と福祉が保障され、文化的、経済的、環境的に豊かで魅力的な空間が形成され、そこに『学び』を求めて世界から人々が集う地域のことである」という「岡山大学が考える学都の定義」を紹介することにしたい。（いずれも2013年10月検索）
- (3) 岡山市での関連動向について補足すれば、同市の第十七師団が廃止されてから重要なステータスシンボルになったと考えられる第六高等学校は、結局1945年6月の空襲で校舎や寮が焼失し、復興を果たせぬまま終戦後まもなく学制改革で廃校になった。しかしその直前に、占領軍が接収していた旧師団跡地が確保されて、改革後に岡山大学津島キャンパスとなったのであり、六高の跡地は県立岡山朝日高校となった。
- (4) 豊橋市史編集委員会編『豊橋市史 第四巻』（1987年）315ページ。この記述は豊橋市百年史編集委員会編『豊橋市百年史』（2006年）113～114ページでも用いられていて、典拠の『新朝報』記事はこの日付の「師団解散で惨めな寂れ方 一番打撃を被つたは小池附近 市内でも空家札がベタベタ」にあたる。
なお、水口源彦『南栄町物語―軍隊の街から学園の街へ』（自費出版、1996年）50ペー

ジでは、師団跡の南隣りにあたる南栄町（水口氏は同町の総代を務めた）が受けた影響について「多くの兵士がいなくなったことは、この地の経済に手痛い打撃を与えた。まずこの地に現れた影響は、空き家の増加である。折からの不況のもとではこれを埋める借り手は現れず、貸家業の苦難の時が始まる。消費人口の減少は商売にも影響して転廃業が続いた。そのために一応日常生活を充足することができるまでに発展していたわが町の体制も次第に崩れてきた。(…)その他の地にそれを求めざるを得なくなってきた」と記している。

- (5) 拙稿「豊橋第十五師団廃止直後における地元への影響」（『一般教育論集』第42号、2012年）、47ページ。副題を「愛知大学豊橋校舎の、名古屋への一部移転を前に」としたように、同年春の愛知大学名古屋新キャンパス開校による学生の一部移動にともなう、豊橋地区への影響の懸念に対する参考として構成してみた論稿である。
- (6) 宇垣軍縮での全国的な部隊異動の状況と本質については、とりわけ土田宏成「陸軍軍縮時における部隊廃止問題について」（『日本歴史』第569号、1995年）でまとめられている。
- (7) 第十八連隊の移転構想および運動に関しては、註4の『豊橋市史 第四巻』など地元史関連の各書で記述されているが、こうした動きは「衛戍地撤廃運動」としてこの時期全国的に起りはじめていた。それについては荒川章二『軍用地と都市・民衆』（山川出版社日本史リブレット95、2007年）が詳述。
- (8) 「グレート〇〇」という呼称は、周辺を含めたロンドン都市圏としての“Grater London”理念から来ているようであるが、豊橋と同時に師団が廃止された地区では岡山に使用例が見られ（1924.9.27付山陽新報）、やはり都市計画法適用に関連したものとなっている。

「大〇〇」については、「大東京」「大名古屋」のように、この時期にはより一般的になっていたと考えられるが、都市の総合的スローガンとして「グレート…」を含めた各呼称が統合されてきたとも思える。地方都市での「大〇〇」について岡田洋司氏は、同じ愛知県の岡崎地区を例にした論文「地方中小都市と統合原理としての“城下町”意識」（『地方史研究』第277号、99年）46ページで、「近代日本の中央集権体制のなかで地方社会・地方中小都市が“地方”として阻害されるという状況」下で「地域社会の拠点としての地方中小都市の立場を強化しようとする路線への統合をは

かるためのイデオロギー」と定義している。

- (9) 名古屋第三師団の移転運動については、註7の荒川氏ブックレットでやはり言及されているが、筆者も「昭和恐慌期における名古屋第三師団移転問題について」（『愛知県史研究』第7号、2003年）などで、第十八連隊移転運動と絡めて紹介。
- (10) 「旧第十五師団本部」は現在の愛知大学豊橋校舎の南半分にあたり、その中心である旧師団司令部が現在の大学記念館（登録文化財）であるが、師団廃止から（本文中で後述する）陸軍教導学校本部転用までの数年間は、存続・新設部隊の騎兵第四旅団、飛行第七・高射第一各連隊の各司令部や、第三師団経理部出張所に何度か転活用されたようである。それぞれの使用期間など詳細は未確認であるが、本文の通り飛行連隊に続いて高射連隊もほどなく浜松に移駐したことから、いずれも短い間の使用だったと思われる。また、騎兵旅団は満州事変により1932年に中国東北部に出動したため、その後経理部出張所に使用されたのであろう。
- (11) 演習地賠償問題も第十五師団廃止問題の一環として、『豊橋市史 第四巻』などで詳述されているのであり、筆者も「戦前軍縮期の高師・天伯原における『演習地賠償問題』について」（『雲雀野』第27号、2005年）などで、地元の声を中心に紹介。
- (12) 飛行連隊移駐に関する浜松地区の動向は、前記の荒川章二氏が2001年に青木書店より著した『シリーズ日本近代からの問い6 軍隊と地域』および、2002年に日本経済評論社より刊行された上山和雄編『首都圏史叢書3 帝都と軍隊 地域と民衆の視点から』に収録の高村聰史「静岡県の軍隊配備と誘致運動」に詳しい。また、豊橋日日新聞の「国防」観について筆者は、主に「国防」運動と「軍都・豊橋」（上）（下）」（『愛知大学国際問題研究所紀要』第107・108号、97年）で分析してきた。
- (13) 当時の第十八連隊長は、陸軍の中国通として有名だった佐々木到一大佐であり、着任前に山東出兵の際の済南事件で、支援していた中国北伐軍に負傷させられるなどの“背信行為”を受けたことで中国批判に傾き、陸軍が展開していた国防思想普及運動では自ら連隊管区をくまなく講演して、中国への敵意を煽動した。これまでの拙論では、佐々木について「佐々木到一豊橋連隊長と国防思想普及運動」（『愛知大学総合郷土研究所紀要』第56輯、11年）に、豊橋での普及運動の全容について註12拙論の

(12)

「軍都」から「学都」へ — 豊橋の場合 — (2)

(下) で、それぞれ紹介。

- (14) 註12拙論の(上)では、山東出兵での第十八連隊出動の際の、豊橋の様子と豊橋日日新聞の主張について言及。
- (15) 豊橋陸軍教導学校および予備士官学校についての書には、浪崎敏武遺作『豊橋陸軍教導学校史(稿)』(自費出版、1990年)および、前回にも紹介した兵東政夫『軍都豊橋—昭和戦乱の世の青春に捧げる—』(同、2007年)などがあり、拙論では『愛知大学史研究』第3号(09年)に「豊橋にあった、陸軍教導学校と予備士官学校」を、「愛知大学の『施設面での“前身”』として」との副題で発表。
- (16) 十五年戦争期の第十八連隊の戦歴は日清・日露戦争や山東出兵ともども、これも前回でも紹介した兵東政夫『歩兵第十八聯隊史』(同刊行会、1994年改訂版)に詳述されている。
- (17) 本稿で取り上げた豊橋日日新聞の記事は、前回ともども豊橋市中央図書館所蔵のマイクロフィルム版を使用したが、同館では戦前戦後の地元紙はほぼマイクロ化されていて、統合後の豊橋同盟新聞(1942年8月まで存在)も例外ではない。
- (18) この時期豊橋で臨時編成された部隊としては、1939年編成の第二二九連隊(第三十八師団隷下)があり、太平洋戦争突入後は第一一八連隊(第四十三師団隷下)が編成された。また、第十五師団も1938年に京都の師団管区形で復活し、のちにはインパール作戦に参加したことで有名になったが、豊橋との直接の関わりはなかったと思われる。
- (19) 本文冒頭および註1の河西英通『せめぎあう地域と軍隊』17ページでは、「総じて、満洲事変以降、地域からの発言・イニシヤティブが消滅し、一路、総力戦体制の下、(軍隊と地域)関係は乖離・切断・希薄化し、最終的には軍隊によって地域が破綻・破壊へと突き進むという構図になる」として、註12の荒川『軍隊と地域』20ページでも、「それまでつくりあげてきた地域と軍隊との関係が切断され、希薄化していくアジア太平洋戦争期」と、同様の表現を用いて定義しているが、いずれも導入部の結論であることにも注目したい。
- (20) この結果に関して、最近の地元紙に興味ある特集記事が掲載された。すなわち、2013年6月21日付東愛知新聞「豊橋空襲から68年 今も残る謎 愛大周辺なぜ免れたか」では、
〔記事前日の〕20日で「豊橋空襲」から68年。太平洋戦争末期の1945(昭和20)年に行われた同空襲にはいまま最大の謎〔が〕

残っている。米軍はなぜ陸軍関連の施設が数多く配置されていた、現在の愛知大学豊橋校舎周辺を狙わなかったのか? 「戦後の接収をもくろんで外した」〔と〕の説と「地方都市の軍施設など関心がなかった。市街地から離れていたので助かった」という説に分れている。

と冒頭で紹介して、空襲の全容や両説の具体的根拠を説明した上で、「ともに一理あるが、わかっていない」「謎を解くための明確な文書は、出てこない可能性が高そうだ」と結んでいるのである。

- (21) 註4の水口源彦『南栄町物語』152ページ。近藤恒次『時習館史』(愛知県立時習館高等学校創立80周年記念事業実行委員会刊、1979年)885～887ページの記述および一覧表を典拠にしているが、同書には「利用案」の出典についての詳細は記されていない。

なお、水口氏の書では近隣住民としての立場・視点から、こうも述べている。

わが町南栄は軍事施設と隣合わせで長い間陸軍とは深い関係にあった。その陸軍が敗戦によって壊滅したことで、わが町も重大な影響を受けた。しかし、全国到るところが焦土と化したなかであって、わが町並み及び兵営等の施設にそれほどの被害がなかったのが、わが町はいち早く発展のチャンスをつかむことができた。

(134ページ)

豊橋の市街地の大部分は空襲によって焼失した。その中には沢山の学校や官公庁が含まれていた。これらの落ち着き先として旧軍隊の建物が脚光を浴びてきたことは自然の成り行きであった。(…)その当時はわが町は「軍隊の街」といわれた。ところが南栄町は、豊橋鉄道線南栄駅を中心に、朝・夕は豊橋中学校、豊橋工業の生徒等の通学でにぎわうようになった。また愛知大学の開学とともにこの地に沢山の学生が下宿したので、南栄町は「学園の街」に変貌した。(152～153ページ)

- (22) これまで“節目の年”にあたって何度か刊行された「愛知大学史」のうち、例えば最初の『愛知大学 十年の歩み』(愛知大学十年史編纂委員会編、同大学刊、1956年)15～16ページでは、豊橋市への新大学設立決定後、場所が第一予備士官学校に決まるまでの一連の過程が述べられている。なお、本稿では「第三者からの目」を重視する意味から、愛知大当局による通史の記述を取り上げるのは原則控えることにし

た。ご了承されたい。

- (23) 註21の近藤恒次『練習館史』885、888ページには、横田忍の前任の豊橋市長より1945年11月上旬に「先に豊橋商業に内定した第一予備士官学校砲兵隊跡を豊橋中学にまわすから、豊橋中学校に予定した歩兵隊跡を名古屋工業専門学校（現名工大）に譲ることに同意して欲しい旨の丁寧な申し出があった」ことと、その後歩兵隊跡への名古屋工専の移転が「教授会・学生大会などの反対によって沙汰止みとなり、暫くの間占領軍が駐留したのち、豊橋市立商業学校が使用し、のち愛知大学が入って」現在に至ったことが記されている。
- (24) ほかにこの書の55ページでは、「3 軍都の変貌」の見出しに続いて、「豊橋は明治以来既述の如く軍都として知られていた。市の南部高師原一帯に設置された兵営区は例え師団廃止にあっても消滅する事なく、軍機関に相続^(マツ)いで利用され終戦を迎えたのである。この地域は殆ど空襲を免がれ、広大な敷地・建物が無傷のまま文化産業施設に転用された点を特筆しなければならぬ」としてから、転用の特徴を4点列挙している。
- (25) 和木康光『知を愛し人を育み 愛知大学物語』（中部経済新聞社、2012年）での34～35ページには、当時の横田市長ら豊橋側の思惑や動きについてこう叙述されている。

市関係者や地元経済人のあいだでは「豊橋再興」の手だてを探るのに必死だった。しかし、確たる方向はまだ見出しかねていた。／そこへ舞い込んだ話一。

「上海から引き揚げてきた大学教授が、新たな大学を創る土地として予備士官学校跡地を検討している」

かつての軍施設に大学を誘致して、戦前、軍都として栄えた豊橋を文教の府として甦らせようか…。／横田は、それに思索の糸を引っ掛けた。大学のある自治体は数少なく、しかも六大都市に限られている。豊橋に大学ができればまちのイメージはよくなる。市としてのランクも上がる。市勢も一変する。軍都から学都に転換され、全国から若い学生が集まる…そんな光景が現実となる。／こちらから誘致するまでもなく、相手の方から候補地の一つに目を付けてくれている。願ってもない好機だ。／この絶好のチャンスを逃がすまいと思った。大学設立の熱い思いを聞き、その篤実さを感じ取った横田は相手の決断を促すように言った。

「大学はぜひ豊橋にお創りなさい。豊橋なら学生たちにひもじい思いをさせません」

そう言いながら、机の引き出しから何やらごそごそと取り出して、机の上にはぽんと置いた。サツマイモだった。(…) 現物を示して食糧確保をデモンストレーションするのだった。

- (26) 愛知大学の創設50年に際しての『愛知大学五十年史 通史編』（同史編纂委員会編、2000年）、60年に際しての『愛知大学小史 六十年の歩み』（同史編集会議編、2006年）といった公式の書のほか、近年学内外の各氏の手によって註24の和木氏著書以外にも、越知専^{まこと}『本間イズムと愛知大学 実例編—その真髄を実話から学ぶ—』（愛知大学東亜同文書院大学記念センター、2009年）、加藤勝美『愛知大学を創った男たち—本間喜一、小岩井浄とその時代—』（愛知大学、2011年）、藤田佳久『日中に懸ける 東亜同文書院の群像』（中日新聞社、2012年）といった各書において、各氏それぞれの筆致で述べられている。
- (27) 本稿では要約文の形にしたが、この宇垣の言は角田順校訂『宇垣一成日記 I』（みすず書房、1968年）464ページ（1925年5月1日付）に収録されていて、筆者も「宇垣軍縮と「軍都・豊橋」—「衛戍地」問題をめぐる『豊橋日日新聞』の主張—」（『愛大史学』第4号、1995年）62～63ページほか各論で引用してきている。
- (28) それを示す記述として、よく引き合いに出されているのが井上靖『しろばんば』である。井上氏の父が軍医として第十五師団に赴任していたことから、豊橋を訪れた思い出にもふれたこの自伝的小説では、伊豆在住の登場人物の「豊橋もうでの自慢話」として「三島に師団があるかや。静岡だって聯隊だけじゃ。(…) 豊橋というところは、あんた、師団がある。師団というものは聯隊の寄り集まったところじゃ。それ一事考えただけでも、豊橋が三島と較べられたら、豊橋が泣くわ」と語らせている（新潮文庫版、1988年新版、132ページ）。
- (29) 前回にも紹介した鈴木富志郎「戦前期日本における中心地について—非営利的地域システムの考察—」（『愛大史学』第9号、2000年）が、戦前（大正末～昭和初期）の常備団体（＝師団）と旧制高校とを相互比較する形で、副題で示されている考察を展開している。
- (30) もっとも、（名古屋市は別格として）豊橋市の「両隣り」にあたる岡崎市や浜松市でも、近年相次いで大学が新設されたり短大が昇格

してきているのであって、豊橋に複数大学が所在するようになったことで「学都に変わった」と即断することはできまい。これら中規模都市それぞれの、戦後の「大学との関わりのウエイト」についても比較研究の価値はあると考えているが、少なくとも豊橋は、岡崎や浜松にはなかった師団の跡地に、大学など各学校が集中して建てられたことが特長なのであり、この“強み”を生かした街づくりが望まれるのではなかろうかということを、最後に重ねて述べておきたい。